

言葉教育は零歳から

赤ちゃんが、片言を言い始めるのは、一般に、生後八か月を過ぎたころです。それまでは喃語期なんごと言って、「ウーウー」とか「バーバー」というような、全く意味のない発声をしています。この時期に、母親は、簡単な言葉をはっきりとした発声で、やさしく語りかけてやるのが大切です。

母親の言葉を耳に反復して聴くことによって、それを発声することは出来なくても、それを頭の中に蓄えることは出来るのです。だから、「マンマ」と赤ちゃんに語りかけてごらん下さい。赤ちゃんは、じっと母親の口を見つめるでしょう。

片言期に入りますと、母親の語りかける言葉を一心に聞き取ろうとするかのように、母親の口元を見つめ、それが「マンマ」「ウンマ」というような、発音しやすい言葉だと、すぐに真似て「マンマ」「ウンマ」と言うようになります。この時の赤ちゃんの姿は、実に真剣そのもので、母親の言葉を完全に真似せずにはおかない、という努力が見られます。

だから、それから二年くらいの間、日本語の正しい語法にのっ

た話し方で、言いたいことが言えるようになるのです。大阪に育てば大阪弁を、東北に育てば東北弁を、実に見事に身につけて、微妙な発音を巧みに寸分の違いもなく発声できるようになるのです。

このように、赤ちゃんの“真似る”まね(=学ぶ)能力は実に高いのですから、赤ちゃんが目覚めている時には、大人同士の会話でも、やさしい、美しい声で話すように努力することが大切です。勿論、夫婦喧嘩など慎まなければなりません。

こんな幼い赤ちゃんだから大丈夫だ、などと考えたらとんでもないことです。「幼い赤ちゃんだからこそ、気を付けなければいけない」のです。言葉が話せなくても、言葉を頭の中に蓄えることは出来るのですから。